

将来につなげるオンラインイベントの試み：その意義と成果報告  
 Online Courses and Interactions for Future Study Abroad: a Report on Its Significance  
 and Results

森川結花, 甲南大学  
 Yuka Morikawa, Konan University  
 谷川依津江, 甲南大学  
 Itsue Tanigawa, Konan University

## 1. はじめに

コロナ禍の影響により 2020 年 9 月以降、本研究が日本語教育に携わってきた短期交換留学プログラム（甲南大学 Year-in-Japan プログラム、以下、YiJ プログラムと呼ぶ）は開催中止を余儀なくされている。この間、正規の留学プログラムに代わるものとして、協定校で日本語を学ぶ学習者を対象としたオンラインイベントを提供してきた。

本研究のいうオンラインイベントとは、学習者の参加は任意であり、参加し活動したことによる成績評価や単位付与のないオンラインでの学習活動のことをいう。つまり、オンラインイベントには成績や単位、学習シラバスや教科書のような、教師にとっても学習者にとっても「しぼり（制約）」となるものがない。「しぼり」がないゆえに、コース半ばで参加者が取り組みを断念する気持ちになった時には引き止めることもできない。しかし逆に、通常の授業コースでは扱えなかった内容を扱うことができるという「自由」もある。本研究はこの「自由」というメリットを生かし、コロナ禍の中で来日の夢がかなわない状況下にある学習者に向けて、将来の日本語学習や日本留学への動機づけが維持・促進させることを目的としたオンラインイベントの企画と実践に取り組んできた。その中で、参加者が最後まで脱落することなく参加目的を達成できるようにするには、イベントの要素として、①文化の学びがあること、②人と人との交流が含まれていること、③学習者の創造的なアウトプットがあること、の3点が備わっていることが必要であることが確認された。この稿では時系列順に本研究が取り組んできたオンラインイベントの実践と、上記3要素が見出されていった過程を報告する。

## 2. 日本語プレセッションコース（2020年11月～12月）

### 2.1 背景事情

このコースは2020年6月に構想が始められた。当時は2021年1月からの春学期からYiJプログラムが再開できると見込まれており、その受け入れ準備の一環としての位置づけであった。再開が見込まれていたとはいえ、ホームステイや研修旅行など、従来はYiJプログラムの呼び物であった母語話者との接触や交流は難しい状況となるであろうという判断もあった。また、来日直後は一定期間の隔離生活を強いられるであろうということも予想されていた。この不自由な留学生活からでも最大限の留学の成果をあげるためには、1) 来日直後の生活と日本語学習をスムーズに軌道に乗せる、2) 留学先の地域リソースから自律的に学びを深める態度を養うという2点を留学予定者に来日前から意識的に準備させておく

必要があると考えられた。この流れから「日本語プレセッションコース」が2020年の11月～12月の2か月間にわたって提供されることになった。実際には2021年の春学期は10月初旬に中止が決定したが、それでも受講希望者10名に対して、実際にこのコースが提供された。

## 2.2 日本語プレセッションコースの概要

日本語プレセッションコースは、コースの目的を「来日後の生活と日本語学習を円滑に始めるため」とし、0初級者向けとして「ひらがな・カタカナ」「あいさつ」の2コース、既習者向けとして「漢字を見つけて楽しもう」「いろいろな日本語」「会ってみたい日本の人々」「和訳トレーニング」の4コース、計6コースを開講した。受講対象は協定校で日本語を学ぶ学習者である。受講者はまずオンデマンド動画教材（1回分10～15分）を視聴し、動画の内容にそって作成された課題ワークシートに取り組み、それに対するフィードバックや口頭練習を個別指導行う。学習管理システムとしてPadletを採用し、教材（動画、課題ワークシート）やZoomリンクの配信や課題提出、質問と回答など教師とのコミュニケーション手段に活用した。1コースの授業は5回～10回、平均7.3回の授業を設定した。

6コースで使用した44本の動画教材はすべてこのコース開設にあたって作成されたオリジナル教材で、甲南大学の地元・神戸に存在する地域リソースをふんだんに盛り込んでいることが特徴である（森川2021）。田中・斎藤（1993）の分類では「リソース」は「人」「物」「社会」の三つにカテゴリー化される。これらのうち、日本語プレセッションコースでは、YiJプログラムゆかりの大学スタッフや在学生、卒業生、学内の施設やキャンパス周辺の地域、関西方言の日常会話などを素材として扱っている。これによって、コースの受講生にとっての留学予定地である神戸の魅力を伝え、日本留学に対する期待感と日本語学習の動機づけを維持・促進する効果をねらった。

## 2.3 実施状況と問題点

2020年11月～12月に実施した2020年度日本語プレセッションコースには英国から3名、米国から7名、計10名の学習者がコースに登録した。登録者1名あたりのコース登録数の平均は2.5コースであった。2か月間で登録コースの取り組みを完了できた受講生は2名と少なく、8名は1～3回の受講までで継続断念となった。

受講コースを完了できた2名のうち、1名は休学自習中であり時間の管理が本人の思い通りになることが幸いしたものと思われる。逆に、コースを完了できなかった8名からは、大学で履修中のコースとの両立の困難さを訴える声がアンケート調査の結果にあがっていた。このほか、同期クラスを時差や都合に配慮して教師と受講生の個別セッションの形にしていたことも、却って受講生にとってはマイナスの効果を生んでいたのではないかという点も途中断念の要因として考えられる。個別セッションはクラスメート不在の学習環境である。そこでは学習者にとってはMurphey（1998）にあるNear Peer Role Modelがなく、身近な目標や

良い意味での刺激（励み）が得られず、学習継続意欲の低下に歯止めがかからなかったのではないかと推測される。

## 2.4 問題解決にむけて

以上の日本語プレセッションコースで生じた問題点を踏まえ、2021年1月に甲南大学協定校（米5校、加2校、英1校）で学ぶ日本語学習者のオンラインコースに対する意識調査を行い、69名からの回答を得た。その中で、「甲南大学が提供するオンラインコースでどんなことを学びたいですか」という質問に対しては、図1に示すような回答結果が得られた。

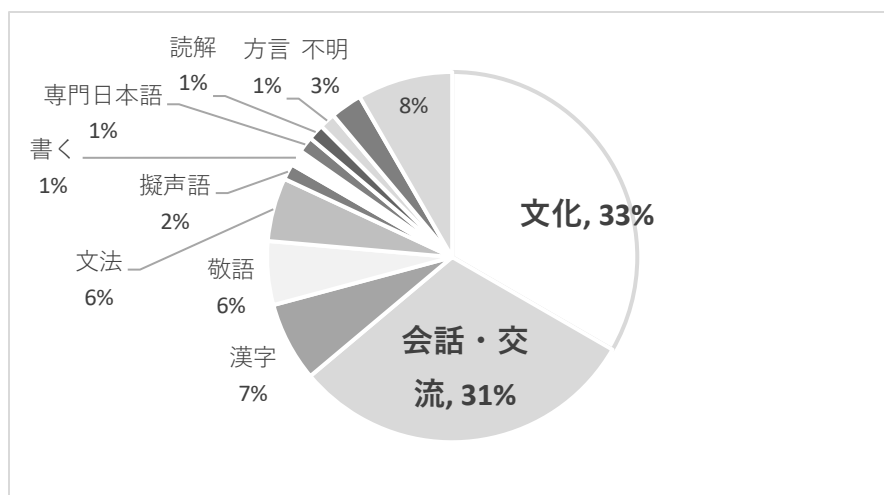


図1 海外の日本語学習者はオンラインコースで何を学びたがっているか  
(自由記述回答、複数回答可)

これらの回答の中で最も多かったのは「文化」（33%）、続いて「会話・交流」（31%）であった。「文化」には「神道」「刀」「茶道」「俳句・短歌」のような伝統文化のほか、現代社会におけるマナーやゲーム文化など様々なものが含まれていた。

この結果から、オンラインイベントを提供するにあたって学習者の期待に応えるには、「文化」と「会話・交流」の二つの要素を含んだ活動内容を設定しておくことが必要であるという方向性を導き出すことができた。

## 3. 現代短歌創作ワークショップ“Kobe through TANKA”（2021年2月）

### 3.1 ワークショップの概要

前出のアンケート調査の結果を踏まえ、「文化」と「会話・交流」の2要素を含んだオンラインイベントとして、2021年2月28日に現代短歌創作ワークショップ“Kobe thorough TANKA”を実施した。当日のワークショップ講師は現代歌人・なべとびすこ氏が担当し、海外の日本語学習者および学内外の日本人学生に参加を呼びかけた。参加申込時の登録学習者数は18名であったが、当日参加し

た学習者は10名（米国6名、カナダ3名、台湾1名）、日本人学生の参加は5名であった。使用アプリはZoomである。

当日のワークショップでは、まずアイスブレイクとして自己紹介の後、好きな日本語の単語の拍を手拍子で数え、日本語の拍に慣れるためのアクティビティーを行った。そして講師から短歌創作の基本についてのミニ講義を全体で受けた後、日本人1名と学習者2～3名を1チームとし、ブレイクアウトルームに分かれて短歌穴埋めワーク（既成の現代短歌の2首について、隠された単語を推測する）に取り組んだ後、グループでの短歌創作活動に入るという手順で進められた。短歌の創作は、神戸在住の一般市民の協力者から寄せられた神戸の風景写真・動画を見て得た印象から連想することばをリストアップし、それを使って短歌を詠むという形で行われた。穴埋めワークも短歌の創作も、どちらもグループ内での話し合い活動を伴う。そして最後に、グループで創作した短歌を全体の前で披露し、講師のなべとびすこ氏が講評するという形で成果を共有した。また、後日、成果物の短歌を写真・動画の提供者にも共有した。

### 3.2 参加者の反応

ワークショップ後に行ったアンケート調査には11名の参加者から回答が得られた。「参加したことで満足感は何を得られたか」という質問に対して、11名全員が5段階評価の5（非常に満足感を得られた）と回答した。「ワークショップのどの部分を楽しかったか」という質問に対しては、「グループで短歌を詠んだこと」が9名（81.8%）、「グループで短歌の穴埋めワークをしたこと」が2名（18.2%）であった。その理由について自由に記述された回答には、「グループの皆さんの意見、好きな言葉を含めて短歌を作るのは楽しかったです」というものに代表されるように、「グループ活動」「思考や感情などの表出」、そして、「成果物の作成」を半数以上（6名）の学習者が肯定的に評価していた。これらをシンプルな言葉でまとめると、このワークショップにおいて、「みんなで頭と日本語を使って何かを創り出す活動」をしたことで参加者が大きな満足感を得られる活動になっていたということがわかる。

以上から、このワークショップで参加者が満足感を得られた要因として、現代短歌の創作という「文化」活動をしていること、そのためにグループでの協働作業が「会話・交流」になっていることに加え、参加者が自分の思考や感情などを短歌という形に「アウトプット」しているという3つの要素を抽出することができる。特にこのワークショップの場合は「アウトプット」が短歌という目に見える成果物として残り、参加者にとって実感を伴った喜びとなりやすいということもいえるだろう。

以上から、現代短歌創作ワークショップ“Kobe through TANAK”において、活動内容に「文化」「会話・交流」「アウトプット」という3つの要素が含まれていたことが参加学習者の満足感につながっていたことが確認された。

## 4. オンラインホームステイプログラム（2021年3月・4月・5月）

### 4.1 プログラムの概要

YiJプログラムはホームステイを伴う短期交換留学プログラムとして40数年の伝統を持つ。これまでホストファミリーの人材に恵まれてきており、コロナ渦中においてもホストファミリーのYiJプログラムに対する関心は薄れていない。また、2.4にあげたアンケート結果からも明らかなように、学習者からも一般の日本語母語話者との交流を望む声が多い。そこで、ホストファミリーの協力をあおぎ、「オンラインホームステイプログラム」を企画・実施することになった。

このプログラムは1か月完結型で、2021年の3月、4月、5月の3回にわたって行われた。月ごとにテーマが定められ、それに従ってホストファミリーから動画ないし写真の形で情報が提供される。参加する学習者は3週間にわたってホストファミリーとのオンライン交流前の準備学習と口頭練習に取り組む。同時に、学習者も自己紹介動画の作成をし、ホストファミリーに公開する。この過程を経た後、第3週目の週末にホストファミリーとの同期セッションを持ち交流をする。第4週目には、学習者はホストファミリーへのメッセージ動画を作成し、それがホストファミリーに公開されて一か月間の活動の完結となる。使用したアプリはZoomとPadlet、Dropboxである。

以下に3月、4月、5月の実施状況を示す。

表2 オンラインホームステイプログラム実施状況

実施月	テーマ	参加ホストファミリー	交流参加学習者
3月	教育（小学校）	1家族	6名（英1韓1米4台1）
4月	料理	2家族	7名（米5加1台1）
5月	家の中の様子、家電や家具	4家族	14名（韓6台1加1米6）

学習者の申し込み登録者の総数は40名であったが、そのうちの19名が実際の活動に参加し、21名は全く参加しなかった。参加した19名のうち、複数月にわたって参加した学習者は5名（2回参加2名、3回参加3名）であった。

### 4.2 プログラムのコースデザインの特徴

オンラインホームステイプログラム1か月間の流れを図2に示す。

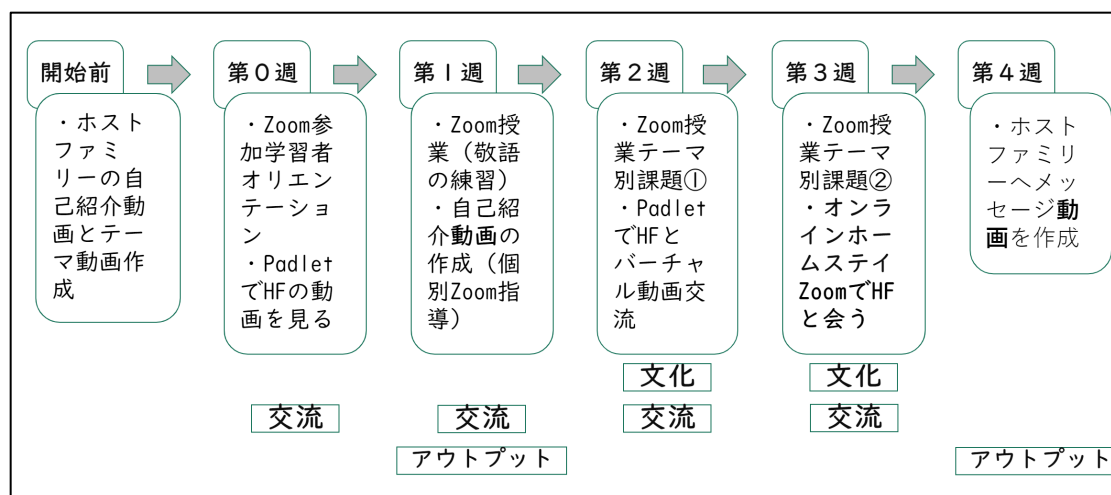


図2 オンラインホームステイプログラムの流れ

図2に示されている通り、オンラインホームステイの特徴は、「文化」「交流」「アウトプット」の機会が1か月間の随所に設けてあることである。ホストファミリーのテーマ動画の視聴とテーマ別課題（ワークシート）に沿った同期クラス、そしてオンラインホームステイ当日は文化についての学びがある。Zoomでの同期クラス・セッションでは学習者間およびホストファミリーと交流ができる。また、ホストファミリーへの「自己紹介動画」とオンラインホームステイ後の「メッセージ動画」を作成することで学習者は表現したい内容を「アウトプット」することができる。動画作成は、学習歴の浅い学習者や日本語での口頭表現が苦手な同期セッションでは実力が発揮できない学習者にも挽回のチャンスとなり、自己表現と伝達の願望が実現する。このようなコースデザインによって、学習者にとって悔いの残らない参加経験が担保される。

### 4.3 参加者の反応

5月のラウンドが終了したのち、参加した学習者19名に対して事後アンケート調査を行い、15名から回答を得た。このプログラムに関して参加者の満足度は高く、5段階評価の5（非常に満足感が得られた）と回答したのは13名（86.7%）、4と回答したのは2名（13.3%）であった。このプログラムの最も良かった点についての自由記述回答には14名からの回答があり、「ホストファミリーとの交流（6名）」、「日本語での会話の機会が得られる（5名）」「他大学の学習者や教師との交流（3名）」「日本の日常生活に触れられること（3名）」「動画の視聴や作成（2名）」を高く評価するコメントが見受けられた。その一例を以下に示す。

I liked how I got to meet students and the teachers from all around the world. It was interesting to get to know everyone and where they're from. I especially liked meeting the Host Families and their life in Japan. It was an enjoyable online experience.

また、10名の参加者が回答したこのプログラム全体の感想としては、「楽しかった」「勉強になった」というコメントの他、4名が「将来」について言及していた。そのうちの2例 A)B)を示す。

- A) I wish I practiced Japanese more. I have a lot more to share with everyone but with my little Japanese, I wasn't able to do that properly do that. I will practice more and hopefully see everyone else again!
- B) It was such great experience to participate in this program! Thank you, sensei, for making this happen! I hope there are ways for host families and students to keep in touch if possible. At least for me, if I visit Japan in the future, I hope to pay a visit to the host families to thank them in person.

A)のように自分の日本語力の足りなさを実感し無念さをバネに将来の努力を決意するケースもあれば、B)のようにプログラムでの活動内容や出会いに満足し、ここで得た人間関係を将来につなげたいという希望を抱いたケースもあるようである。いずれの場合も、このプログラムに参加した経験が刺激となって、参加者の将来の活動や日本語学習への動機づけを強める効果を生んでいると見てよいだろう。

ホストファミリーからの反応もおおむねよく、参加した8家族中、事後アンケート調査に反応のあった5家族のうち、1家族が「大変満足」、4家族が「満足」と評価した。コメントからは、「学生との交流の機会を持ててうれしかった」「初めてのオンラインで一時間でしたが、学生たちの日本に対する関心、思いが伝わって来て、いい経験ができた」とポジティブな感想が見られた。その一方で、「一度だと時間が限られてしまうので、同じメンバーと何度か交流したい」といった機会の少なさ短さを指摘する声もあった。また、「オンラインだと言語能力の高い学生を中心にしたコミュニティーが形成されてしまう。対面だと表情やジェスチャーを交えて、しっかりアイコンタクトをとることで言語以外のコミュニケーションがとれるが、オンラインでは難しい」という、学習者の能力差に起因する参加度の差と、従来の対面コミュニケーションを完全には再現できないことに対する戸惑いの声もあった。特に、1家族に学習者が10名程度の多人数のマッチングになると個別の学習者への配慮が行き届きにくくなることから、ホストファミリー側に不安が生じたようである。学習者側からはこの点に関して特にコメントはなかった。その理由としては、学習者がすでにオンラインセッションに場慣れしていることと、自分以上に日本語力のあるクラスメートを前述の Near Peer Role Model として肯定的に捉えていたからではないかと考えられる。

## 5. まとめと今後の課題

学習者にとって正規の授業外のオンラインイベントに参加するということは、全く未知のコミュニティーに入って新たな人との出会いと活動を経験するということになる。未知のものに挑戦することはそれなりにストレスの高いものである

に違いないが、新しい経験が学習者を成長させ、将来の次のステップへと押し出す原動力となる。一連のオンラインイベントの中で本研究は「リピーター」となるタイプの学習者に会った。彼らからは、この終わりの見えないコロナ禍の状況にあっても、新しい学習の機会を見つけては挑戦を続け、着実に日本語力を伸ばしていく様子が観察された。

コロナ禍のような危機的な状況の中では、将来に向けての希望と日本語学習を継続するための動機づけを保ち続けることには困難が伴われる。しかし、この状況下にあっても、オンラインイベントという形でなら学習者に新たな人との出会いと活動経験の場を提供することは可能である。そして、そこに「文化の学び」と「人と人との交流」、そして「アウトプット」の活動内容を仕組んでおくことで、参加する学習者により高い満足感を得させ、将来への希望と動機づけを強めることができる。そのことが本研究の2020年秋以降続けてきた実践から明らかになった。

以上の実践から得た知見を踏まえ、本研究は次のステップへの歩みを進めている。それが、2021年9月25日に開催予定の「等身大で語ろう—私たちのこれからの「文化」」と題したオンラインイベントである。「文化」をキーワードに日本国内外で日本語を学ぶ学習者と、文化と国際交流に志を持つ日本語母語話者をつなごうとするものである。このイベントには、甲南大学ゆかりの伝統文化の担い手をゲストスピーカーに招く。学習者と同世代の彼がコロナ禍中においてどんな思いを抱き、それをどのような言葉で表現するか。オンラインイベントの参加者たちがこの出会いをどのように将来につなげていくか、今後も関心の持たれるところである。

## 謝辞

本研究は、科学研究費補助金21K00616（代表：森川結花）、平成3年度公益信託兵庫県婦人会館ユネスコ基金（代表：森川結花）、平成2年度大学発アーバンイノベーション神戸（代表：谷川依津江）の助成を受けたものである。

## 参考文献

- 田中望・斎藤里美（1993）『日本語教育の理論と実践：学習支援システムの開発』大衆館書店
- 森川結花（2021）「来日前の学習者を対象にした動画教材作成の試み：地域リソースを利用したコンテンツの開発」『甲南大学教育学習支援センター紀要』6, 109-126
- Murphey, T (1998) “Motivating with Near Peer Role Models” *JALT’97: Trends & Transition*, 201-206